

漁師からみた大原漁業史

絵と文・熱田親憲

題字・熱田素華

紀伊・房総

くろしお物語

◇20◇

今回は大原港(千葉)船主で、かつては船長(真いすみ市)に係留さとして船に乗り、漁業(れいている「松鶴丸」の組合の発展に寄与さ

れ、現在は大原地区の街づくりを心砕いておられる中村松洋さんを訪ねた。子供のころ近くの熊野神社で大漁の絵馬をみて、外房では江戸時代後期からイワシ漁が盛んであったことを知った。しかしその漁法が紀州漁民からの伝授であったことを知った。大正、昭和初期から漁船や漁法が進化し、浜でなく沖合でのイワシ漁が行われるようになり、網元が複数誕生。その漁船に乗り組む水夫を近隣から集め、漁港も整備され、漁業が産業として賑わいを見せた。網元を中心とした大型船以外にも、小

家族総出で水揚げを続け可能な海洋保全のため「撒き餌」を制限するなどの対策に疲労困憊した。そんな姿を見た息子がUターンして松鶴丸二代目船長に2008(平成20)年に納まってくれて、ほっとしている。ニッコリなさつた。そして「器械根」の穴場について語ってくれた。ひとつ目は大原港より10数km沖にある漁場で



きかいね 器械根
 遼海で広く、砂場と岩場が入り組んだ特殊な地形。



海釣り

「器械根」で生計立て

型船でタイ、ヒラメ、タコ、イセエビ、サザエなどを「はえ縄・一本釣り・刺し網」の漁法で近くの穴場「器械根」で生計を立てる漁家も増えて大原港は大賑わいしたとのこと。松鶴丸もその中の一隻になっていた。近場で生計を立てている漁家の多くは家内産業で、父親が船頭、兄弟や子供が乗組員、そして漁から帰ると港や砂浜海岸で妻やお婆さんなど

た。後発のため集客に難儀するなかで、釣り客から疑似餌を使う「ルアー船」をやらないかとアドバイスを受け、迷いながらも始めてみた。釣法も釣り具もお客様から聞いてノウハウを覚え、そのためにパソコンを死に物狂いで学んだと話された。ルアー船を囲む環境も厳しく、漁船、遊漁船などの協調、釣れないという客クレームへの対応、未永く持

ある。二つ目は親潮の寒流と黒潮の暖流がぶつかるところで、多種多様な魚介類が豊富に生息している。三つ目はイセエビが「伊勢海美」の地域ブランドをもちていることだと誇らしげだった。

東京駅から100kmほどの大原港は釣り人レジャーの受け皿として恵まれた地理的条件にあることを再認識して、帰阪のため外房特急にとび乗った。